



Title	地域社会における小規模宿泊施設の役割に関する一考察：長野市善光寺門前のゲストハウスのイベントを事例として
Author(s)	石川, 美澄
Citation	生活学論叢, 20, 95-102
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/50799
Rights(URL)	http://lifology.jp/
Type	article (author version)
Note	研究ノート
File Information	lifology20_ishikawa.pdf



[Instructions for use](#)

研究ノート

地域社会における小規模宿泊施設の役割に関する一考察

—長野市善光寺門前のゲストハウスのイベントを事例として—

A study on the roles of the small inns in local community —A case of the guesthouse's events in Monzen area, Nagano City—

石川美澄 ISHIKAWA Misumi¹⁾

The purpose of this study is to clear up the roles of the small inns in local community. As a specific case in point, the study examines the events planned by guesthouse “Nagano Guesthouse (*Tentative*)” located at Monzen area, Nagano city. The events are three. 1) shared meal as potluck party, 2) handicrafts, 3) meeting of local members.

In conclusion, the study suggests the following: 1) The Nagano Guesthouse has a function of the tourist's accommodation. 2) In Addition, this guesthouse is created as a build up interaction opportunities among the local community members and tourists. 3) Also, The Nagano guesthouse has role as the communication opportunities with local members. 4) Therefore, the small inns has possibilities of role as interactive hub in the local community.

キーワード：地域社会、小規模宿泊施設、イベント、観光

Local community, small inns, events, Tourism

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

平成19年1月、わが国では観光立国推進基本法が施行され、同年6月の閣議決定では、観光立国を実現するために観光立国推進基本計画が作成された。この計画では、日本人1人当たりの国内観光旅行宿泊数を1泊延ばし年間4泊とすることや訪日外国人旅行者数を1,000万人とすることなどが目標として掲げられている〔観光庁ホームページ(アクセス2012年1月7日)〕。そのため、比較的低価格で気軽に宿泊できる宿泊施設の整備と充実が急がれている。一方、血縁や地縁、会社・学校などの社縁を基盤とした関係性の希薄化や地域共同体の弱体化が指摘されているなかで、観光の特性を活用した地域振興やまちづくりを通じた地域共同体の再構築や新たなコミュニティのあり方が実践されている〔西村編2009、宗田2009〕。

このような社会的背景のなかで、現在、一部の小規模宿泊施設型のゲストハウスは、その担い手である若年層の創造性を活かして、地域社会、とりわけ都市部における多様な人びとの社会的な接点や交流の場として展開しつつある。

小規模宿泊施設に関する既往研究は、宿泊施設の物理的側面に着目した工学的アプローチ〔岡村・天野・三浦1990〕や温泉

地や観光地の小規模宿泊施設の分布・展開、経営動向などに関する研究〔浦2001〕、グリーンツーリズムでの民泊や都市と農山漁村との交流に関する研究〔曾2010〕などが挙げられる。これらから指摘できることの1つは、地域社会、とりわけ都市中心部における小規模宿泊施設の社会的・文化的な役割に関する議論は、十分に行なわれていないということである。なお、都市部における宿泊施設の立地や施設自体の変容、地域振興との関係に関する議論として、石澤・小林〔1991〕、鈴木〔2011〕、松村〔2009〕などがある。また、地域社会における交流の場に関する既往研究として、コミュニティカフェを事例とした研究〔田中2007〕や寺に言及した論考〔広井2008〕などが挙げられる。

以上の社会的背景と学術的課題を踏まえ、本稿では、地域社会における小規模宿泊施設の役割を実証的に明らかにすることを目的とする。具体的事例として、近年、大都市や地方都市など都市部で増加傾向にあるゲストハウスのイベントがどのような過程を経て展開されているのかを分析する。その上で、地域社会における小規模宿泊施設の役割を再考する。

なお、本稿の目的を達成することで、地域社会における観光業・宿泊業の新たな役割を検討する上での知見を提示できる。さらに、生活学の視点から小規模宿泊施設を捉え直し、都市部

1) 北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻 博士後期課程 Email:ishikawa@cats.hokudai.ac.jp
Hokkaido University, Division of Tourism Creation, Graduate School of International Media, Communication, and Tourism Studies. (doctoral program)

における地域の人びとと観光者との関わり合える場を考察することで、今後の生活学の研究領域における観光の重要性を示唆することが可能であると考えます。

1-2 方法論・調査事例対象の選択理由・用語の定義

まず、本稿はフィールドワークから得たデータを分析し考察する実証的アプローチを採用する。調査事例対象は、長野県長野市にある1軒のゲストハウス（以下、長野ゲストハウス）である。調査手法は、長野ゲストハウスにおける地域の人びとや旅行者が参加するイベントや集まりの参与観察であり、そこから得た1次データやフィールドノーツ、ホームページなどのウェブ資料を基に分析を行った。調査期間は、2011年7月5日～15日、17日～27日までの22日間であり、筆者はこの期間中ヘルパー¹⁾という立場をとった。また、本調査は筆者1人によるものである。なお、この方法論は、サンプリングが合目的であることやそこから得られた理論や知見は広く一般化できないという特徴があることに留意する必要がある〔寺下 2011〕。

次に、民宿やペンションに代表される小規模宿泊施設の中でも、ゲストハウスを調査事例対象として選択した理由は、都市部には民宿やペンションなどの小規模宿泊施設は相対的に少なく、また近年ゲストハウスが都市部で急増しているという社会的背景にある（例えば、読売新聞 2011年2月14日）。このような社会現象は、地域社会と小規模宿泊施設との関係性の変化や、人びとが地域社会や観光の現場に求めるものの質の変容を示唆している。また、ゲストハウスは地域社会における旅行者の受け皿という既存の役割とは異なる、新たな役割を指摘できる可能性を示唆している。以上の理由から、地域社会における小規模宿泊施設の役割を再考するために、都市部のゲストハウスを取り上げた。

なお、複数あるゲストハウスの中でも、本稿の事例として長野ゲストハウスを取り上げた理由は、以下の点にある。それは、長野ゲストハウスが地域密着型のゲストハウスを目指している点や、善光寺門前で新たに生活をスタートさせたIターンやUターン者、通勤者、大学生、子どもをもつ母親、そして旅行者といった地域社会に関わる様々な属性の人びとが関わる交流イベントを複数企画し実践している点である。これらの点から、本稿の目的を達成するための分析事例に妥当であると判断した。

本稿における用語の定義は、以下のとおりである。なお、本稿は実証的アプローチを採ることから、ここでは「感受概念」としての用語の定義にとどめる〔佐藤 2006: 94-99〕。

①地域社会：一定の地理的範囲において、「人間が、それに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバー

間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」とする〔広井 2009: 11〕。なお、地域社会の構成メンバーのことは地域の人びと、一定の地理的範囲や行政区分は地域と示す。

②小規模宿泊施設：個人や家族、あるいは少人数のグループによる経営・運営で、彼/彼女らの「趣味趣向」が「宿の個性」として表れており、かつ旅館業法上の営業許可を有する小規模な宿泊施設〔財団法人日本交通公社 2004: 72〕。

③ゲストハウス：小規模宿泊施設のなかでも、自らを「ゲストハウス」や「バックパッカーズ」「ホステル」などと呼称している比較的低廉な宿泊施設。

④イベント：ある主体が、何らかの「目的達成のために、特定の人あるいは不特定多数の人を集め、時間と場を共通する話題性」や一回性、臨時性のある催しや集まりとする〔北川 2008: 14〕。

⑤観光：楽しみや余暇のために居住地以外の場所を訪れる旅行に関連する「社会や文化のダイナミズム」のこと〔山下 2011: 3〕。

なお、本論の構成は、第2章で長野市と善光寺門前ならびに長野ゲストハウスの概要を説明する。第3章では、長野ゲストハウスにおけるイベントおよび地域の人びとの集まりに関する調査結果を示す。第4章では、前章の結果から指摘できる小規模宿泊施設の役割について考察を行なう。そして、第5章でまとめと今後の課題を述べる。

2. 調査対象事例の概要

2-1 長野市の概要

長野県長野市は、2005年に1町3村を編入し、2011年4月1日現在、人口約38万7千人、面積834.85平方kmの地方都市であり、長野県県庁所在地である〔長野市産業振興部観光課編 2006、長野市ホームページ（アクセス 2011年9月5日）〕。古くから交通の要所であり、1998年の長野冬季オリンピック・パラリンピックの開催の前年（1997年）に長野新幹線が開通したことにより、東京から1時間30分程度でアクセス可能となった（新幹線利用）。長野市周辺には、小布施や白馬、志賀高原など多くの観光スポットがあることから、ビジネス客だけでなく、国内外から訪れる観光客も絶えない。

なお、鈴木〔2008〕によれば、冬季オリンピック以降、長野市中心部では宿泊施設の客室の過剰供給や外部資本（中央資本）によるホテルの増加、飲食や婚礼サービスを提供しない宿泊特化型の経営形態の出現などがみられたという。また、長野新幹線の開通によって、関東圏から長野市への日帰りが可能となっ

た。これにより、関東圏からのビジネス客が長野市中心部に宿泊する機会が減少したと指摘している。

2-2 善光寺門前の概要

長野市にある善光寺を中心とした一帯（以下、門前とする）は、門前町や宿場町として知られており、それは善光寺と善光寺宿の本陣があった大門町が中心となって形成されてきた。しかし、信越線長野駅の開業（1915年）や長野駅から大門町までの中央通りの拡幅工事（1923年完了）、長野電鉄開通（1926年）、1967年以降の長野駅前の土地区画整理事業による大規模小売店舗の出店などによって、長野市（特に旧長野町）の中核的地域は、善光寺前から権堂・長野銀座、長野駅前へと南下している〔石澤・小林1991〕。

善光寺は、年間600～650万人が訪れる長野市を代表する観光名所である²⁾。仲見世通りには、土産店や飲食店など比較的小規模な店舗や個人商店が立ち並んでいる。また、多くの宿坊もみられる。その先に南下するとJR長野駅まで中央通り（善光寺表参道）がほぼ一直線に通っている。中央通りには、大型商業施設やチェーン店などの立地や出店が目立つ。なお、筆者によるヒアリング調査では、3年程前から善光寺周辺では、I/Uターンや門前を気に入った人びとが空き家・空き物件を改装した上で新たに生活を始めたり、飲食店などの比較的小規模な事業を立ち上げたりするということが増えてきたという意見が得られた³⁾。

2-3 長野ゲストハウスの概要

長野ゲストハウスは、2010年秋に開業した定員12名、1泊1人2,000円台半ばのゲストハウスである（調査実施時における）。JR長野駅から徒歩約20分、善光寺から徒歩10分弱、中央通りから1本道を外れたところに立地している。周辺は戸建てが立ち並び、徒歩圏内に飲食店や酒屋、銭湯、書店、コンビニエンスストア、スーパーマーケットなどがある。民家と倉庫を改装した建物の1階部分は、キッチンやラウンジ、トイレ、風呂、洗面台などの共用スペースで占められている。2階部分には、3つの客室とスタッフルームがある。

長野ゲストハウスを経営・運営しているのは、県外出身の30代女性（以下、オーナー）である。オーナーは、国内・海外での就労経験があり、長野県内の観光地におけるホテル勤務経験もある。ゲストハウスの経営と運営に関するほとんど全ての業務・作業は、彼女1人で行っている。ただし、繁忙期にはヘルパーを募集することがある。

長野ゲストハウスは、開業して1年を経たところであり、近隣の住民や地域社会にとっては比較的新しい存在であると考

えられる。しかしながら、近所のおばあさんが世間話に立ち寄ったり、大学生が海外渡航に際してアドバイスを聞きに訪れたりするなど、地域の人びとに受け入れられている、もしくは必要とされている側面が確認できる。

3. 調査結果

3-1 はじめに

本章では、参与期間中に確認できた複数のイベントおよび地域の人びとの集まりの中から、3つ（シェア飯会、福チクの会、Aくんを囲む会）を取り上げ、それらの展開過程と具体的内容をまとめた。

上記3つを分析対象として取り上げた理由は、いずれも参加者として宿泊者と地域の人びとの両者の存在が確認できたこと、筆者自身が比較的長時間参与することができたこと、3つそれぞれが目的の異なるイベントおよび地域の人びとの集まりであることが挙げられる。これらの理由から、小規模宿泊施設の新たな役割についてより多角的に考察することが可能であると考えた。なお、参与期間中に確認できた複数のイベントおよび地域の人びとの集まりは、表1に示した。

3-2 シェア飯会の概要と展開過程

1) 概要

長野ゲストハウスでは、門前の住民やその近隣で働いている人びとと、I/Uターンによって長野市および近隣で暮らし始めた人、旅行や業務などで長野ゲストハウスに宿泊する人びとの三者が参加可能なイベントとして、月1回のペースで「シェア飯会」を実施している。これは、オーナーの“三者の新たな出会いや交流の場をつくりたい”という意識によるものであり、2011年4月から企画・実施されている。

シェア飯（しゅあめし）とは、ゲストハウスで行われる食材や食事の時間を他者と共有する行為であり、ゲストハウスでは度々使われる表現である。ゲストハウスでシェア飯が行われる理由の1つに、ゲストハウスの多くは基本的に素泊まりであるという点が挙げられよう。そのため、食事は外食か、ゲストハウス内のキッチンでの自炊、惣菜などを購入しラウンジで食事を済ませるというのが一般的である。ラウンジで食事をとる場合、食事の時間が他の宿泊者と重なるなどして偶然的に共に食事をする場合がある。ただし、本稿では、ゲストハウスのオーナーが、宿泊者や地域の人びとに呼びかけて行うイベントとして実施されている月1回開催の三者の交流を目的としたシェア飯会を分析する。

2) シェア飯会の展開過程と内容

表2は、シェア飯会の展開過程を時系列にまとめたものである。開催日時や大まかな条件、内容がオーナーによって決められた後、それらの情報はインターネット上の様々な情報発信ツールで発信される。その情報を受け取った地域の人びとが、シェア飯会への参加の意志表明を行う。この時点で、地域側の参加者が概ね決定する。長野ゲストハウスの宿泊者も同様に、これらの情報を得ている場合もあるが、基本的には宿泊予約申込時や当日のチェックインの際に、オーナーから直接シェア飯会を開催する旨が説明される。このようにして、宿泊者側の参加人数などもほぼ決定する。

概ね15人程度となった時点で募集は締め切られる。この15人程度というのは、ラウンジに配されている1つのテーブルを全員で囲める人数である。オーナーによれば、「15人程度がまとまりやすく、それ以上の大人数になると、2つあるいはそれ以上のグループに分かれてしまうので、このくらいの人数がちょうどよい」とのことである⁴⁾。なお、仕事終わりにシェア飯会に立ち寄る地域の人びとや、外食先から戻ってきた宿泊者が話の輪の中に加わることもあるため、参加人数は流動的である。

シェア飯会では、参加にあたって1つの条件が設けられる。それは、参加者は1人につき1品持ち寄り（以下、1人1品持ち寄り制）というものである。ただし、この条件は緩やかなものであり、具体的な1品の金額や種類、数（量）などは決められていない。そのため、参加者各自が持ち寄る品は様々で、手づくりの煮物や惣菜屋のコロッケ、スナック菓子、酒、アイスクリームなどがテーブルに並ぶこととなる。何を持ち寄るかという具体的な中身については、参加者自身に委ねられている。なお、オーナーは、1人1品持ち寄り制のメリットとして、自分自身が大量の料理を調理せずに済むという負担軽減の側面や参加者が近隣の個人店舗等で食材や総菜を購入することで、少なからず地域社会に貢献できるという点を挙げている。

シェア飯会は、基本的にはオーナーの一言（例えば、「そろそろ始めますか」など）によって、皆で乾杯をすることから始まる。乾杯後、参加者たちは、各自が持ち寄った料理の品々を皿に取り分けるなどして食事を始める。食事や会話をしばらく楽しんだ後、もしくは乾杯後に参加者らの自己紹介の時間が設けられる。これは、オーナーが傾合いを見計らって、自己紹介をするよう皆に一言声をかける。自己紹介では、自身の氏名（本名またはニックネーム、あるいはその両方）や出身地・居住地、宿泊者か近隣の住民かどうかなどが話される。このような過程で、互いに共通する興味や趣味が分かたり、長野に関する情報交換などが行なわれたりする。1人の話を全員で聞くこともあれば、隣同士で会話が弾むなどいくつかのグループに分かれ

表1：参与期間中に長野ゲストハウスのラウンジで確認できた複数のイベントおよび地域の人びとの集まり

時期	内容	参加者属性と人数
月上旬	シェア飯（皆でたこやきを焼く）	・門前および近隣の20～30代の自営業者や居住者、GH宿泊者（訪日旅行者含む） ・約10名（入替あり）
月上旬	パソコン講習のため	・地域の人びと（属性不明） ・2名
月上旬	軽い食事をしながら雑談	・門前および近隣の20～30代の大学生と自営業者、30～40代のGH宿泊者 ・約6名（入替あり）
中旬	シェア飯（一部の宿泊者による手作り餃子、スイカ割りなど）	・門前および近隣の20～30代の会社員や自営業者とその友人、GH宿泊者（訪日旅行者含む） ・約11名（入替あり）
中旬	福チクの会	本文中に示すため省略
中旬	シェア飯会	本文中に示すため省略
中旬	門前研究会の中の1つ「観光分科会」が開かれる	・おおむね30～70代の門前および近隣の分科会メンバー ・計11名（入替あり）
下旬	GH宿泊者の知人（近所の人）が遊びに来て、居合わせた人びとと雑談	・門前の居住者兼自営業者、10～70代のGH宿泊者（訪日外国人含む） ・約10名（入替あり）
下旬	Aくを囲む会	本文中に示すため省略
下旬	シェア飯（1人1品持ち寄り制）	・門前および近隣の20～30代の自営業者、30代前後のGH宿泊者 ・約6名（入替あり）

※参与観察によるため、全参加者の正確な年齢は不明である。また、参加者数にオーナーと筆者はカウントしていない。なお、網掛け部分は本文中に取り上げた事例である。※表中のGH宿泊者とは、長野ゲストハウスの宿泊者を指す。

表2：シェア飯会の展開過程と内容

<p>【オーナーによる企画・情報発信】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日時や内容の決定 ・ホームページやブログ、Twitter、Facebookでの情報発信
<p>【参加者による参加表明と一応の締切】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターネットツールや口頭を通じた参加者の意思表明 ・参加者は15名前後で一応の締切となる
<p>【シェア飯会の開始】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者が集まり、各自持ち寄った1品をテーブルに並べる ・参加者の大体がそろったところで、乾杯する ・自己紹介 ・様々な行為やコミュニケーションのやりとりが行われる（例：調理、食事、会話、SNSなどの情報交換など） ・途中参加や途中退席などもある
<p>【シェア飯会の終了】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ある程度、料理が無くなったり、会話がひと段落したりすると、オーナーやヘルパー以外に、一部の参加者が自主的に片付けを始める ・オーナーによるシェア飯会参加者のTwitterアカウントを羅列したツイートやシェア飯会のブログ記事が情報発信される

てコミュニケーションが行われる場面も見られた。

今回の参与観察では、シェア飯会の最中に携帯電話で写真を取ったり、その写真をSNSを使って発信したりする様子はみられたが、メールアドレスなどの個人情報交換の様子はいほとんど見られなかった。一方で、シェア飯会終了後は、オーナーによるシェア飯会参加者のTwitterアカウントを羅列した情報発信（以下、Twitterでの情報発信をツイートという）が行なわれた。これにより、Twitterアカウントを持っている者同士は、今後オーナーを介さずとも互いにコミュニケーションをとることが可能となる。

3-3 福チクの会の概要と展開過程

1) 概要

このイベントは、長野ゲストハウスで定期的に開催されている「福島ブランド食べ比べ」と、不定期で開催されている「チクチクの会」という2つのイベントのコラボレーション企画として催されたものである⁹⁾。福チクの会は、ニードルフエルト（羊毛）を使って、福島名物の起き上がり小法師を作り、その後冷奴を食べるといふ手芸とシェア飯が合わさったイベント内容であった。参加費は、材料費や冷奴代、オーナーが会津若松から取り寄せた「本物」の起き上がり小法師代を合わせて、1人1,800円であった。当日の参加者は、門前界隈の20代~3,40代の女性を中心に、手芸のアドバイザーとオーナー、筆者を含む女性9名と男性1名の計10名であった。

2) 展開過程と内容

福チクの会の展開過程と内容をまとめたものが、下記の表3である。このイベントの展開過程と内容は、シェア飯会とほぼ同様である。シェア飯会と異なる点は、福チクの会では手芸という個人的な創作活動を行いながら、皆でその時間や会話を楽しむという点である。

長野ゲストハウスの近所で糸専門店を構える女性がアドバイザーとなり、彼女が当日使用する針や羊毛などの手芸材料を用意した。一方、オーナーはシェア飯用の豆腐を用意する必要があった。イベント当日の朝、オーナーが、「皆さんのおすすめの豆腐を教えてください」という内容をTwitter上でツイートしたところ、「善光寺近くにある商店に置いてあるD豆腐〔仮称〕がおすすめ」という情報から、福チクの会でD豆腐を準備することになった。

夕方の開始時刻が近づくにつれ、参加者は三々五々集まり始めた。参加費はイベント開始前に支払われた。その支払方法は、長野ゲストハウスの入口近くに置かれた小さな箱に、各自が参加費を入れ、釣銭が必要な物はその箱内から取るというものであった。その際、オーナーは参加者が確実に参加費を支払ったかということは確認していなかった。そのため、参加者が互いに確認し合うなど、各自の「良心」に任されていた。参加者がほぼ揃ったところで、オーナーが皆にアドバイザーを紹介した。そして、アドバイザーから手芸で使う道具や材料説明が行なわれた。その後、各自好きなデザインの起き上がり小法師を作り始める。ニードルフエルト版の起き上がり小法師の参考にと、オーナーから会津若松の「本物」の起き上がり小法師が配られた。作業の途中には、参加者の自己紹介が行なわれたり、互いの作品の途中経過を見せ合ったりする場面がみられた。

全員の起き上がり小法師がほぼ完成したところで手を休め、

皆の起き上がり小法師が一か所に集められる。1体作った者もいれば、2体、3体作る者もいた。ほとんどの参加者は、デジタルカメラや携帯電話で“起き上がり小法師の集合写真”を撮影していた。写真撮影と並行して、オーナーと数人の参加者が、キッチンで豆腐を切り、冷奴の準備に取り掛かっていた。その他の参加者は、食器や醤油などを用意するなど、役割分担が行われていた。この準備の過程では、「豆腐はどれくらい大きさに切ったらいいと思う?」「これ(皿)、運んでもらっていい?」「コップはどこにありますか?」といった日常的なコミュニケーションが交わされていた。なお、切り分けられた絹と木綿のD豆腐と一緒に、長野ゲストハウスの近隣で製造されている薬味やしょうゆ豆などが出された。

表3: 福チクの会の展開過程

【オーナーとアドバイザーによる企画・情報発信】
・日時や参加費、手芸内容の決定 ・ホームページやブログ、Twitter、Facebookでの情報発信 ・宿泊予約者に対する事前説明
【参加者による参加表明と申し込み締切】
・インターネットツールや口頭を通じた参加者の意思表明 ・参加者締切（10名）
【福チクの会の開始】
・オーナーとアドバイザーによる材料の準備 ・参加者が集まり、個々に参加費の支払いを済ませ、席に着く ・オーナーによるアドバイザーの紹介 ・アドバイザーによる作業手順の説明 ・起き上がり小法師の制作開始 ・自己紹介 ・互いのでき具合を見合ったり、写真を撮ったりする ・冷奴を食べる準備と食事・雑談が行われる
【福チクの会の終了】
・オーナーによって、福チクの会の写真などがブログ記事となり情報発信される

3-4 Aくんを囲む会の概要と展開過程

1) 概要

Aくんを囲む会のAくんとは、長野市の大学に通うAさん(仮名、20代前半男性)のことである。そしてAくんを囲む会とは、Aさんの出身地（以下、a市で開かれたまちづくりのワークショップに参加したAさんの経験やワークショップ内容を、地域の人びとの間で共有しようという主旨のもとで開かれた集まりである。

2) 展開過程と内容

Aくんを囲む会（以下、囲む会）の展開過程をまとめたものが、表4である。Aさんは、a市でのまちづくりワークショップが開催されることを、開催直前にTwitter上のツイートで知った。このワークショップに参加することを決めたAさんは、a市に帰省する当日の早朝に、長野ゲストハウスのオーナーを訪ねた。その理由は、オーナーが持っていたまちづくりに関す

る本(今回のまちづくりワークショップの運営メンバーの1人が執筆したもの)を借りるためであった。その後、Aさんはa市に向けて出発する。出身地で開かれるまちづくりワークショップに参加するというAさんのこの行動は、Aさん自身によってTwitter上でツイートされた。そして、Aさんのこの動きを知ったAさんと面識のある門前の人びとから、「Aくんが門前に帰ってきたら、ワークショップでどのようなことを経験してきたのかを共有する機会をもとう」という話が出された。このような出来事があり、囲む会の開催は、Aさんが長野市を出発してから間もなくその開催が決定された。

囲む会は、長野ゲストハウスのラウンジで平日の夜に開かれた。この会もシェア飯会と同様に、予め1人1品持ち寄り制で行うことが伝えられていた。当日の参加者は、Aさん、Aさんとハウスシェアをしている男子大学生、デザイナーなどの自営業者、会社員など20~30代の男性が中心であった。彼らは、日頃から様々な機会とAさんと交流をもっており、互いに面識があった。また、門前の地域活性化やまちづくりに対して比較的関心の高い人びとであると思われる。上述した2つのイベントと同様に、囲む会においても自己紹介の時間は設けられたが、互いに面識があるため挨拶程度であった。

まず初めに、Aさんからa市の概要とワークショップの内容が話された。また、ワークショップ当日に配布された資料も、参加者の間で回覧された。Aさんによる説明が一通り終わったあと、参加者から疑問や質問が出された。その質問内容は、例えば「a市の人口はどれくらいか」、「WSはどういった雰囲気であったか」などであった。それらの問いかけに対し、Aさんは自分の意見を述べたり、時折ワークショップ時に書きとったノートを見ながら質問に答えたりしていた。なお、a市でのワークショップは、Aさんが参加した会が初回であった。今後も月に1度開催されるこのワークショップに、Aさんは継続的に参加したいと考えており、その意向も皆に伝えていた。

囲む会は、食事をしながら話は進められた。ただし、ノートにメモをとったり、パソコンに記録したりする個々の参加者の姿も確認できた。オーナーと筆者は、調理をしながらの参加であった。なお、各自が持ち寄った料理の品々は、男子大学生は手作りの炊き込みご飯を鍋ごと持参し、仕事帰りの会社員やデザイナーは惣菜や揚げ物などを持ち寄った。オーナーは、手作りのパンを焼いた。

当日外出していた宿泊者の1人(年配の女性)は、囲む会が始まる頃に長野ゲストハウスに戻ってきた。彼女は、ラウンジに人が集まり、テーブルの上には色々な料理が並

んでいるのを見て、「これから何かあるの?」と尋ねた。オーナーが、囲む会の主旨と、もし参加されるのであれば何か1品用意してほしい旨を伝えた。彼女は、参加するかどうかしばらく迷っていたが、「面白そうだから少しだけ参加するわ」となり、外出先で購入していた1品を持って、会に参加した。なお、彼女は門前の出身者であった。

表4: Aくんを囲む会の展開過程と内容

【オーナーとAさんのやりとり】
<ul style="list-style-type: none"> ・本の貸し借り ・Twitter上で、今回のAさんの体験を共有する機会をつくろうという話が出る ・この時点では開催日時などは決まっていない
【日時決定と参加者の把握】
<ul style="list-style-type: none"> ・Aさんの都合を加味した開催日時の決定 ・Twitterを使って、門前の人びとの参加希望者を募る
【Aくんを囲む会の開始】
<ul style="list-style-type: none"> ・各自、持参した料理を並べたり、ノートパソコンや筆記具などを用意したりする ・簡単な自己紹介 ・Aさんによるa市の概要とワークショップ内容の説明 ・参加者からの質問・参加者間での意見交換 ・これらと並行して、食事も行なわれる ・途中参加する者も数名いた ・Aさんの体験談などが一段落すると、雑談などが交わされた
【会の終了】
<ul style="list-style-type: none"> ・どの段階で囲む会が終了したのかは明確にはわからなかった

4. 考察：地域社会における小規模宿泊施設の新たな役割

4-1 はじめに

前章の参与観察の結果を踏まえて、本章では地域社会における小規模宿泊施設の新たな役割について考察する。本章でいう新たな役割とは、小規模宿泊施設の基本的な役割である地域社会における旅行者の受け入れ施設や地域社会における観光振興の一端を担うという側面以外の役割のことを示している。

そのため、本稿では、小規模宿泊施設の新たな役割として、①地域社会で日々暮らす人びとと、その地域を一時的に訪れる旅行者との交流の場としての役割、②地域社会の人びと同士との交流の場としての役割という2つの側面に着目して考察を行う。

4-2 3つのイベントおよび地域の人びとの集まりの特徴

3つのイベントおよび地域の人びとの集まりの特徴を、表5にまとめた。参与観察の結果とこれらの特徴を踏まえると、以下の5点が指摘できる。

①長野ゲストハウスのイベントおよび地域の人びとの集まり

は、概ね20~30代の若年層によって構成されており、参加者は多様である。

②長野ゲストハウスでみられるこのような交流の場は、多様な

人びとと接点を持ちたいというような積極的・自発的に他者との出会いやコミュニケーションの意志を持った個人の人々の集まりである可能性が高い。

- ③しかしながら、その場に居合わせた旅行者が即興的に参加したり、地域の人びとが仕事終わりに偶然立ち寄りたりすることも確認できた。また、その場への参加は、誰からも強制されない。そのため、イベントの構成メンバーは、積極的に他者と関わろうという意志を持った者以外の人びとの参加もみられ、ゲストハウスならびにイベントなどに対する個人の人々の関わり方は多層的である。
- ④イベントおよび地域の人びとの集まりが開催される場所は、長野ゲストハウスである。しかしながら、オーナーの主催という側面は強くなく、個人の人々のその場への参加そのものがそれぞれのイベントや集まりを構成しているといえる。例えば、1人1品持ち寄り制は、個人の人々のイベントへの参加を積極的に誘発したり、イベントそのものを創りだしたりする仕組みの一つであると考えられる。
- ⑤面識のない者同士や普段ほとんど接点のない者が集まり、楽しみながら交流するには、他者との時間や情報、感情の共有や共感が必要である。長野ゲストハウスでは、互いに顔を合わせやすくするために1つのテーブルを囲んで食事をするということや、1人1品持ち寄り制、様々なSNSの利用などが確認できた。

表5：3つのイベントおよび地域の人びとの集まりの特徴

参加者の属性	①概ね20～30代の男女 ②地域側：門前に居住する自営業者や会社員、大学生/門前にある会社等に勤めている人/門前近郊の居住者 ③宿泊者側：業務出張者、訪日旅行者、旅行者など ④宿側：オーナー、ヘルパー
参加条件	①1人1品持ち寄り制（菓子や酒なども含む） ②参加費の支払い
コミュニケーション機会の誘発	①共に食事や作業をすること ②自己紹介の実施 ③インターネット端末やSNS、弾き語りなど ④各自が持ち寄った品々 ⑤門前や長野への愛着・関心
地域社会との関わり	①多層的な人びととのコミュニケーション ②門前エリアの店舗情報やおすすめスポットに関する情報・意見交換 ・宿泊者の居住地に関する情報・意見交換

4-3 地域社会における小規模宿泊施設の新たな役割

長野ゲストハウスにおけるイベントおよび地域の人びとの集まりの特徴を踏まえた上で、地域社会における小規模宿泊施設の新たな役割について考察する。

地域社会における小規模宿泊施設の新たな役割は、2つある。1つは、地域社会で日々暮らす人びとと、その地域を一時的に訪れる旅行者との交流の場を創造するという役割であり、もう

1つは地域社会の人びと同士の交流の場を創造するという役割である。広井は、地域社会において、「(見知らぬ)人々が気軽に訪れ、そこでのコミュニケーションが生まれるような拠点的な場所」の重要性を指摘するが〔広井2008：58〕、互いに面識のない人々が単に物理的空間に存在しそれらを共同利用するだけでは、コミュニケーションは生まれにくいと考えられる。共に食事をするという「共食」が、他者とのコミュニケーションの手段となっていることはよく知られているが〔鷺田編著2003：168-173〕、長野ゲストハウスにおいても、シェア飯や手芸による時間や場の共有が、面識のない者同士のコミュニケーションを促進させている可能性が高い。

また、時間や場の共有という側面以外に、相手のことを知るといって自己紹介の機会と、1人1品持ち寄り制による話の「ネタ」の存在も、互いのコミュニケーションを誘発することに大きな役割を果たしていると考えられる。自己紹介は、互いの趣味や関心といった共通点を発見したり、地域の人びとや旅行者などといった参加者属性を把握したりする情報共有の機会といえる。そして1人1品持ち寄り制は、オーナーによって予め準備された料理が並び、それを消費的に食するのではなく、個人の人々が主体的にその場に関わる遊びや余白の部分をつくりだしている。誰もが関わるその部分から、例えば「近所の人からきゅうりをもらいすぎて、1人では消費し切れないから持ってきた」、「料理をするのが好きだから、煮物を作ってきた」というその場限りの、あるいは即興的な話の「ネタ」が生まれ、新たな交流を生み出し易くしていると考えられる。

したがって、小規模宿泊施設の新たな役割は、このような日常的で偶然性が高く、即興的・享乐的なコミュニケーションの連鎖が生まれる場を、地域社会に創造しているという点にある。そして留意すべき点は、その場はオーナー1人によって形成され展開しているのではなく、その時間と場所を共有している個人の人々の参加者が参与し、互いに関係性を構築するプロセスそのものによって成立していると考えられるという点である。

5. おわりに

本稿では、地域社会における小規模宿泊施設の役割を実証的に明らかにすることを目的とし、その分析対象として長野ゲストハウスを取り上げ、考察した。その結果、以下の2点が明らかになった。1点目は、長野ゲストハウスは、その地域を訪れる旅行者の宿泊・滞在先として機能しているだけでなく、地域社会における旅行者と地域の人びとという面識のない者同士や地域の人びとの交流の場をつくり出していたという点である。2点目は、地域社会における小規模宿泊施設の新たな役割

として、地域社会に関わる多様な人びとの交流の場を担っているという点である。

地域社会における社会的接点や交流の場の創出は、これまで地域社会にある公民館や集会所、あるいは近年増加しているコミュニティカフェなどの政策的・社会福祉的要素の強い施設や組織がその役割を担ってきた。しかし、本稿では、これまで観光業や宿泊業という観光産業として捉えられることが多かった小規模宿泊施設においても、それらと類似した役割が見られることを確認した。個々人が帰属するコミュニティが複数化・多層化し、移動性が高まる現代社会においては、個人と個人、あるいは地域社会（場所）と個人との関係性構築が、今後ますます重要になると考える。その際に、地域社会をベースとして多様な人びとが関わる観光現象を事例として、これらのことを検討する作業が必要になるといえる。

最後に、本稿の結果および考察をより精緻化させるために、今後の課題を2点挙げる。1点目は、本稿の結果および考察は、1事例のみを分析したものであるため汎用性に欠けるという点である。2点目は、本稿はゲストハウスのイベント参加者のみに焦点を当てた分析と考察に留まっている。したがって、今後は、別事例で同様の分析を行うことやイベントに参加しない宿泊者やその他の地域の人びとなど様々な属性の人びとに対する詳細なヒアリング調査を実施することが求められる。また、ゲストハウスが、国内の特に都市部で急増している社会的背景についても整理する必要がある。

付記

本稿をまとめるにあたって、北海道大学観光学高等研究センター准教授の山村高淑先生には貴重なご意見をいただいた。また、現地調査にご協力いただいた皆様には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。なお、本稿の一部は、2011年12月に日本観光研究学会全国大会にて口頭発表した要旨を大幅に加筆・修正したものである。

<注>

- 1) 宿泊費用を、自己の労働力を提供することで相殺とする民宿やゲストハウスにみられる個人の役割の1つ。
- 2) 7年に1度の御開帳の年には、約1,100万人となる〔長野市産業振興部観光課編 2006〕。
- 3) 筆者によるヒアリングによる（2011年5月、7月実施）。ただし、門前界限では個人商店が開業するという事は常にあり、急に増えたわけではないという意見も聞かれた。
- 4) ただし、イベントの内容や目的によっては、「長野ゲストハウスの宿泊定員数以上の参加者枠を設け、近隣の宿泊施設を利用してもらえるように心がけている」という。
- 5) 「福島ブランド食べ比べ」は、福島の銘酒や銘菓を食べ、もっと福島のことを知ろうという主旨のイベントである。一方の「チクチクの会」は手芸を皆で楽しもうというものである。

<引用・参考文献>

- 広井良典 2008 「「コミュニティの中心」とコミュニティ政策」、千葉大学公共研究センター『公共研究』第5巻第3号, pp. 48-72
- 広井良典 2009 『コミュニティを問いなおす—つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房
- 石澤孝・小林博 1991 「都市における宿泊施設の立地と推移：長野市を例として」東北地理学会『東北地理』Vol. 43, No. 1, pp. 30-40
- 北川宗忠編著 2008 『観光・旅行用語辞典』ミネルヴァ書房
- 松村嘉久 2009 「大阪国際ゲストハウス地域を創出する試み」、神田孝治編『観光の空間』, pp. 264-274
- 宗田好史 2009 『創造都市のための観光振興』学芸出版社
- 長野市産業振興部観光課編 2006 『長野市観光振興計画「1200万人観光交流推進プラン」』長野市役所
- 西村幸夫編著 (2009) 『観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社
- 岡村勝司・天野克也・三浦敦 1990 「観光地における小規模宿泊施設に関する調査研究：飯山市の民宿・ペンションの実態」社団法人日本建築学会『日本建築学会北陸支部研究報告集』33巻, pp. 233-236 (<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006887352>、アクセス2012年1月11日)
- 佐藤郁哉 2006 『フィールドワーク増訂版 書を持って街へ出よう』新曜社
- 鈴木富之 2008 「冬季オリンピック以降の長野市中心部における宿泊産業の再編成」人文地理学会『人文地理学会大会 研究発表要旨』pp. 66-67
- 鈴木富之 2011 「東京山谷地域における宿泊施設の変容—外国人旅行者およびビジネス客向け低廉宿泊施設を対象に—」社団法人東京地学協会『地学雑誌』Vol. 120, No. 3, pp. 466-485
- 田中康裕 2007 「主がしつらえる地域の場所に関する研究」大阪大学博士論文
- 寺下真美 2011 「第7回 質的研究方法論～質的データを科学的に分析するために～」公益社団法人日本放射線技術学会『日本放射線技術学会雑誌』67巻4号, pp. 413-417
- 曾宇良 2010 「安心院町におけるグリーンツーリズムの展開とその地域の意義に関する研究」日本観光研究学会『観光研究』Vol. 22, No. 1, pp. 25-30
- 浦達雄 2001 「山間温泉地における小規模旅館の経営動向—黒川温泉、長湯温泉を事例として—」大阪観光大学『大阪明浄学紀要』第1号, pp. 1-10
- 鷺田清一編著 2003 『<食>は病んでいるか 揺らぐ生存の条件』ウェッジ
- 山下晋司編著 2011 『観光学キーワード』有斐閣
- 財団法人日本交通公社 2004 『観光読本（第2版）』東洋経済新報社
- <参照資料・ホームページ>
- 観光庁ホームページ (<http://www.mlit.go.jp/kankocho/index.html>、アクセス2012年1月7日)
- 長野市ホームページ (<http://www.city.nagano.nagano.jp/>、アクセス2011年9月5日)
- 読売新聞「京都で「ゲストハウス」急増…低価格、若者や外国人に人気」2011年2月14日